

# 『源氏物語』からみる跡見女学校の教育

——明治・大正期を中心に——

植 田 恭 代

## 要 旨

明治八年、跡見学園の母体である「跡見学校」が開校する。学祖跡見花蹊の目指した女子教育とは、どのようなものであったのか。開校当時から明治の各時期をこえて大正へと変わる時代のなかでの、カリキュラムの変遷については、別稿で概観した。そのうえにたち、さらに当時の跡見の教育の具体的な一面をさぐるために、本稿では、国語ならびに書道の教材としてとりあげられた『源氏物語』を手がかりとして、考察を試みる。新時代を迎えた跡見学園の歴史を知り、現在を考える一助を得たい。

はじめに

明治八（一九七五）年、跡見花蹊が、神田中猿樂町に「跡見学校」を創立する。明治八年開校当時は、国学・漢学のほか学祖自ら担当した習字・絵画に、早く女子教育に加えた点茶等の九科目であり、私塾の色合いの濃い女学校であった。そのカリキュラムの変遷については別稿で述べたが、明治二十一年に小石川柳町校舎に移転した頃から規模も拡大し、明治二十八年の高等女学校規程をはじめとする明治三十年代の相次ぐ法令による女子教育制度化の波を被り、大正七年には高等女学校と同等と認められ、同十年には再度の認定を受ける。学祖花蹊在世中の明治・大正期の跡見の教育は、私塾に由来する精神と、時代の動向のなかで、模索されてきた。では、その教授の具体的なあり方はどうであったか。明治・大正期の跡見女学校における、教育の実践の一面を知るために、本稿では、ひとつの観点として『源氏物語』を据えてみる。それは、『源氏物語』が論者の本学における卒業論文以来の研究対象であり、本学には『源氏物語』に関する諸資料も所蔵されていることによる。ここでは『源氏物語』から跡見女学校の教育をさぐると同時に、あわせてそれら学園所蔵資料の紹介も試みる。

なお、開校時の名称は当時の写真に残っているとおり「跡見学校」であり、その後「跡見女学校」となったようであるが、改称の時期等についての詳細は、現段階では未確認である。本稿では、便宜上、学園諸資料に頻出する「跡見女学校」を用いることにする。

一、跡見女学校の『源氏物語』教育

跡見女学校の学則のなかには、授業時間表が付されている場合がある。そのうち、明治二十年代には、その内容が大きく変わる時期がある。いま、それらを並べてあげてみる。表記は新字体に改めた。

『明治二十五年三月改正 私立跡見女学校規則』

授 業 時 間 表						週 一
土	金	木	水	火	月	自午前八時 至午前十時
英 語 学	英 語 学	英 語 学	英 語 学	英 語 学	英 語 学	
漢書 学画	漢習 学字	漢書 学画	漢習 学字	漢書 学画	漢習 学字	自午前十時 至正午十二時
点 茶	数 学 音 楽	和 学 音 楽	数 学 音 楽	和 学 音 楽	数 学 音 楽	自午後一時 至午後四時

『明治二十七年四月改正 私立跡見女学校規則』

課程表				學級	科目	
算術	漢学	国文学	理科			
幾何学	春秋左氏伝 中庸 史記列伝	源氏物語抄読 万葉集抄読 作文作歌	古事記 栄化物語 近世史ノ口授 文法口授	四年級	本 科	
算術全体演習 開平開立及応用 珠算諸等数	元明史略 劉氏列女伝 文章軌範	万葉集抄読 作文作歌	大建大記 中古史ノ口授 文法口授	三年級		
珠算四則	孟四書 小学句読	古今作歌	増鏡 上古史ノ口授 伊勢物語抄読 十六夜日記 紫式部日記	二年級		
四基法定理 及諸術整数 之性質分数	蒙求 大略 十八史略	竹取物語 作文作歌	神皇正統記 日本外史 徒然草 土佐日記	一年級		
四則応用	書取	国史略 作文作歌	日本外史 国史略	四年級		予 科
全応用	書取	作文作歌	国史略 古今紀要	三級級		
全応用	作文	作文	高等小学読本 常小学読本	二年級		
記数法	作文	作文	常小学読本	一年級		

授業時間表						
授業時間	月	火	水	木	金	土
自午前八時 至午前十時	数学、裁縫	裁縫	数学、裁縫	裁縫	数学、裁縫	裁縫
自午前十時 至正午十二時	漢学、習字	漢学、習字	漢学、習字	漢学、習字	漢学、習字	漢学、習字
自午後一時 至午後三時	国史国文	国史国文	国史国文	国史国文	国史国文	国史国文
	当日午後	当日午後	当日午後	当日午後	当日午後	当日午後
	琴(月、金、水、曜日) 点茶(木、土、曜日) 插花(水、曜日)					

一日を三分する授業時間に変更はないが、二十七年には午後も二時間の配分になる。午後の後半に漢学と習字に書画・絵画を置くのは同じであるが、朝と午後が違う。二十五年規則では、朝は月曜から土曜まで「英語学」であったが、二十七年には毎朝の裁縫と隔日の数学に替わる。二十七年の授業時間表に、英語はみられない。ただし、国学・漢学はそのまま、三十二年規則の本科目には「英語」がある。裁縫・数学は、二十五年では午後に音楽・和学・生花とともに組み入れられており、二十五年に火曜木曜の午後に裁縫・音楽とともにあった和学が、二十七年には国史国文と呼び替えられ、毎日午後に配されている。

国史国文が重視されるこの二十七年に、『源氏物語』を見出せる。もう一方の課程表である。ここには、国学・漢学・数学の年級別の詳細が掲載される。「和学」でも「国語」でもなく、伝統的学問の印象が強い「国学」の語を用い、古典作品を多々採用していることが確認できる。この本科、国学の四年級三年級に「源氏物語抄読」がある。

『源氏物語』は、こうしたカリキュラムの、本科上級生に配する教材である。幸いなことに、明治二十年代前期在学の伊藤歌子氏の所持品が先年本学園に寄贈され、そのなかに、伊藤氏の使用された版本教科書『源氏物語講義』(写真1、2)が残されている<sup>(4)</sup>。これが「源氏物語抄読」専用の教科書であったかどうかは不明であるが、跡見女学校における『源

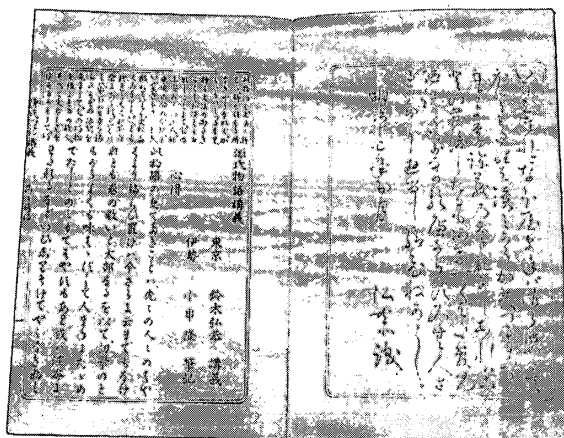


写真1

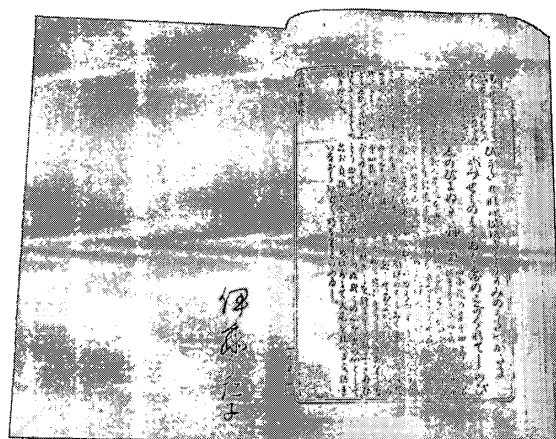


写真2

氏物語』教授を考える、ひとつの手がかりになる。体裁は、和綴じ五つ穴、縦二十四・四センチ横十六・六センチ、表紙は紺地、題箋は白、現在そのうえに文字は確認できない。『源氏物語講義』は「東京 鈴木弘恭 講義／伊勢 小串隆 筆記」とあり、序の最後に「明治十七年四月」と記されている。鈴木弘恭は、旧水戸藩士で弘化元（1844）年正月生まれ、明治三〇年七月三十一日没。和歌を間宮永好に、国学を黒川真頼に学び、史学協会創立に参加し、明治十七年に学習院助教、十九年に辞した後、国文国語を広めるため女子教育に力を入れ、跡見女学校の講師もつとめたという。<sup>5)</sup> 真頼「源氏物語講義序」弘恭「緒言」に続く「心得」には「此物語のめでたきことは。先づの人のほやくより語ら

ひ置けば。今さらに云までもなければども巻の数いと大部なるを以て。初学のともがらよくも味は、ずして。人まねにたゞめでたしとのみもてはやすもあり。或は淫奔にわたれるなどいひしりぞけて。やくなきふみの、しるもあれど。こは作者の意をしらぬからのことにて。いと口惜しきわざなり。おのれ思ふに。作者はもとよりこれをもて人を教訓せんとの定にはあらず。たゞ当時の君臣父子夫婦兄弟朋友の情態を。しかもおぼめかしてかきあらはしたるものとみゆれば。はやくよりこれを諷諭の定にてかきしなるべし。などいふ説もみへたり。紫家七論、源氏物語評釈」とあり、いたずらに賞賛することや、教訓めいた読みの自戒を説く。続く「段落」で、本書では「雲隠」までを四段、宇治十帖を一段として大別していることを述べる。伊藤歌子氏所蔵品は二冊、一冊目には前述の「序」「心得」と「桐壺」「帚木」「空蟬」を収め、二冊目に「夕顔」「若紫」「末摘花」「紅葉賀」を収める。各巻では、本文をあげ、そのあとにその部分の語釈と頭注を付す。桐壺巻冒頭の一文を「人の心をうごかし」と「のみ」の入りぬまま立てており、本文は湖月抄本に依拠しているのではないかと推定される。注は独自のものである。授業で全文を読み切るとは限らないが、『源氏物語』冒頭からの数巻を教材としていたことがわかる。伊藤氏の所持品には、他に活字本の標注国文抄七・八『源氏物語抜萃 末摘花・葵』鈴木広恭輯、敬文堂・明治二十四年刊）もある。

この担当教員の特定は難しいが、『跡見女学校五十年史』（大正十四年四月）の、明治三十三年頃までに教鞭をとった人の一覧から、国語に関する教員として、与謝野寛（国文）、落合直文（国文）、増田于信（国文、

歴史)、服部躬治(国文)、生田目経徳(国語)、大和田建樹(国文)、鈴木忠孝(国文、歴史)をあげることができ、与謝野寛以外の六人は『汲泉』『回顧四十年史』(大正四年三月)の「本校教職員(明治三十三年六月)」の一覧にも、その名を確認できる。これらの人が同時にいたのではなく、また全教員との断定もできない。これをみる限り、与謝野寛は詩歌で知られ、落合直文は与謝野寛も学んだ歌人で国文学者、大和田建樹も国文学者で、本学園校歌を作詞した詩人でもあり、蒼々たる顔ぶれで、『源氏物語』の講義にもふさわしい。

そのなかで、大和田建樹が『源氏物語』の教授に関わっていたのではないかと推測される資料がある。大正十五年に学祖花咲の亡くなったあとの、『汲泉』追悼特集に寄せられた文章のなかで、跡見の教員であった萩谷孝至が、『源氏物語』にふれている。<sup>(6)</sup>

苟も文事に携はり文学を談ずる程の者は之を味読すべきであると思ふが、何に致せ巻帙は浩瀚で、加ふるに随分読み解きにくくあるのみならず、風教上から見ると如何はしいふしも往々あるので、中等学校は勿論高等学校や専門学校でも、先づ手をつけないけれども、一三年前から高等学校用として、其の抄本が二部ばかり出ている。然るに何ぞ知らん、二十五年の昔に於て、我が跡見女学校は「源氏読本」(活版和装もの四巻)を出してゐる。此は当時の本校教師で且つ知名の国文学者たる大和田建樹先生の校訂にかかり、「跡見女学校蔵版」(神田上原書店、今の光風館発行)としてある。巻一が桐壺の巻、巻二が帚木の巻で明治三十四年四月一日発行、巻三が夕

顔の巻で、同年十二月七日巻四が若紫の巻で翌年四月二十八日の発行である。勿論之は各巻とも或箇所は省略してあるが、其の前後は甘く聯絡がついてゐて、生徒の読物として誠にふさはしいものである。……略……それについても私は其の内、此の「源氏読本」を更に改訂増補して上級生徒の読物に充て、以て先生の遺業を継ぎ且つ伝えることにしたい希望をもつてゐる。

大和田建樹は、既製の『源氏物語』教科書そのまま使用するのではなく、跡見女学校版『源氏物語』の校訂をしていた。この文章の題名「花咲先生の卓見」から、跡見版『源氏物語』の編集作製を、画期的なこととする姿勢がうかがえる。追悼文集でもあり、ひとつの内輪の見方であろう。萩谷孝至によれば、跡見女学校版は、全四巻が桐壺巻から若紫までであり、空蟬巻が欠如している。もし、跡見版の帚木巻が前半の雨夜の品定め場面のみを収めるのであれば、伊予介の後妻空蟬と光源氏の密通、及び人違いを描く物語を、女子教育の教材として不適切と判断しての編集かと憶測もされるが、真相はわからない。

大和田建樹は、安政四(1857)年四月二十九日伊予国宇和島丸之内生まれ、和歌国学に通じ、古典講習科講師、高等師範学校及び同女子部などの教授をつとめ、明治四十三年没、跡見女学校には三十二年から出講し四十三年三月に辞任とされるが、<sup>(7)</sup>学内の資料では、「回顧四十年史」の前述「本校教職員」の一覧に名が見え、管見に入ったところでは辞任の記述はなく、その明治四十三年の記述に「十月一日数年来本校講師として令聞ありし大和田建樹先生逝去遊さる」とあるのが確認できる。

大和田は、明治十五年に東京大学書記となり博物場に勤務し、生活の安定を得て、雅楽や同好者を集めて『源氏物語』の講義を始め、大学の編輯所を経て、古典講習科の講師として古典文学を教えた。<sup>(8)</sup> 佐佐木信綱が古典講習科時代を回想(口述筆記)した文章によれば、大和田は、明治十五年に東京大学文学部の付属機関として創設された古典講習科(当初は和書講習科)が<sup>(9)</sup>明治十七年に第二期生を募集した時に、新たに加わった<sup>(10)</sup>という。古典講習科に佐佐木と同期入学した和田英松の、同様の回想(口述筆記)には、小中村清矩が『源氏物語』を講義し、「大和田建樹先生は、当時新進の学者で、私共は「枕草子」や「徒然草」や「土佐日記」や「宇治拾遺」を教へて貰ひましたが、先生は英学にも通じて居られたので、その講義も新しく、私共の興味を随分引いたものでした」とある。<sup>(11)</sup> 大和田は、古典講習科では『源氏物語』ではなくその他の作品を扱っていた。古典を講じるなかに、新しさをも感じさせる気鋭の学者であったことがうかがえる。こうした経歴をもつ大和田が、「跡見女学校版」とはいえ、跡見女学校のために一から『源氏物語』の教科書を作ったかどうか、その判断には慎重でありたい。既存の何らかの『源氏物語』をもとに、手を加えて「跡見女学校版」としたと考える方が、妥当ではないか。もっとも、跡見女学校は教員に恵まれ、教科書にも配慮がなされ、『源氏物語』を積極的にとりあげていたのは確かである。

## 二、折り手本『紫のゆかり』

こうした『源氏物語』は、跡見女学校の書道教育にもとりあげられて

いた。花蹊の手になる法帖仕立ての折り手本に、『源氏物語』由来の文章がある。開校時から書道と絵画は花蹊が担当し、自ら手本を書いて生徒たちに与えていた。『汲泉』七十号(大正十四年六月)「跡見女学校開校五十年記念式の光景」の口絵写真には「五十年前のお手本」として「いろは」を書いた法帖風の手本を掲載している。明治二十七年三月十日には、開校時から揮毫した法帖が一万に達し、<sup>(12)</sup>翌月九日には祝賀会を催している。<sup>(13)</sup> 花蹊が生涯を通して生徒たちに書き与えた法帖は、相当数にのぼったものとみられる。それだけ、跡見女学校では、直筆の手本に力を入れていたことがわかる。そのなかに、『源氏物語』に関わる手本がある。『紫のゆかり』と『源氏文字鎖』である。<sup>(14)</sup>

『紫のゆかり』一〇六(写真3)の体裁は、法帖仕立てで、表紙は黄茶色の布製でそれぞれ濃淡があり、地模様も一様ではない。大きさは、縦十六・二センチ横七・八センチ、「むらさきのゆかり」の表記も漢字の当て方や字母がそれぞれ異なっている。<sup>(15)</sup> 表紙の裏には、手本の使用者であった生徒とみられる「梅子」「大むら梅子」の名が記されており(写真4)、六のみは「花嚙」とある。<sup>(16)</sup> 現存する六帖は、『源氏物語』各帖からその本文の一部を抜き出したもので、「六」は「紅梅」までを収める。これ以後も書き継がれていた可能性も高いが、これだけでは判断しがたい。表紙と冒頭の本文は、次のとおりである。

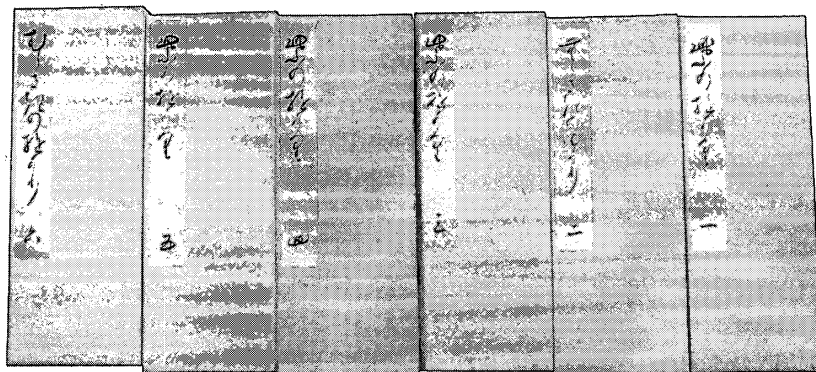


写真3

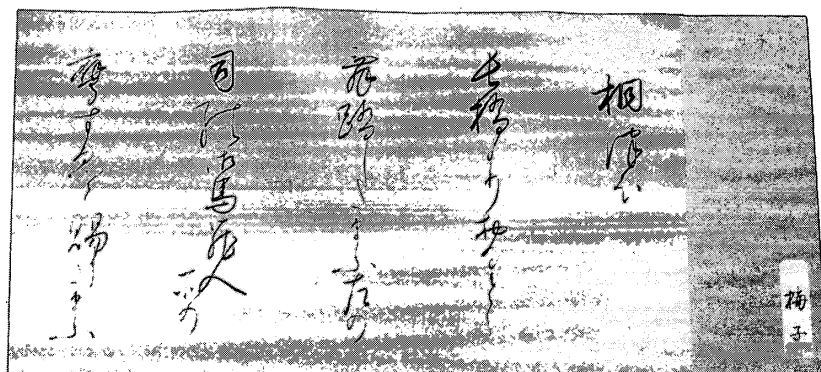


写真4

鷹据ゑて賜りたまふ

桐壺巻巻末の、光源氏元服場面の抜粋本文である。以下、帚木巻以下の文章を翻刻する。紅梅巻に至るまですべて同じ体裁である。改行を「」で示し、抜粋本文の内容が理解しやすいように、念のため括弧内に該当場面を記す。

はき木

田舎家たつ柴垣して前裁なとこゝろとて植ゑたり風すしくてそこはかとなき虫の声々きこえてはたるしけくとひまかひてをかしきはとなり

(紀伊守邸の様子)

空蟬

暁ちかき月くまなくさしいてふと人のかけみえければまたおはするたそとふ民部のおもとなめりけしうはあらぬおもとのたけたちなりといふ

(老女房に咎められる)

ゆふ顔

これ光に紙燭めしてありつるあふき御らむすれはもてならしたるうつり香いとしみふかうなつかしうてをかしうすかひかきたりこゝろあてにそれかとそみるしらつゆのひかりそへたる夕かほのはな

(扇の歌)

紫のゆかり 一  
梅子

桐つほ

長橋よりおりて

舞踏したまふ左の

司の御馬藏人所の

わか紫

うしろの山にたち「いてて京のかたを」見給ふはるかに霞「わたりて四方の  
梢そこはかとなう煙」わたれるほと絵に「いとよくも似たるかな

(北山での会話)

末つむ花

ひとつ車にのりて「月のをかきほとに」雲かくれたる道の「ほと笛ふきあは  
せて」大どのおはしぬ

(光源氏と頭中将左大臣邸へ)

もみちの賀

挿頭の紅葉いたう「ちりすきて顔の」にほひにけおされ「たるこゝちすれは  
お」まへなる菊を折りて「左大将さしかへたまふ

(朱雀院行幸の舞樂)

はなの宴

寝殿に女一の宮女「三のみやおはします」東の戸口におはして「よりの給へり  
藤は」こなたのつまに「あたりてあれは御格子ともあけわた」して人々出て  
居たり「いつれそと露の」やとりをわかぬ「まに」小さくかはらに「風もこそ

ふけ

(右大臣家の藤花の宴) 光源氏の返歌 二場面より

むらさきのゆかり 二

梅子

あふひ

よろしき女車の「いたうのりこほれ」たるより扇をさし「いて、人をまねき」  
よせてこゝにやは「たゝせ給はぬ所さり」きこえむときこえたり

(源典侍)

さか木

もみちはひとり「見侍るに錦くらう」おもひたまふれば「なむをりよくて御」  
覽せさせ給へなど「ありけにいみしき」枝ともなれば御目とまるに例のい  
さゝか「なるものありけり

(光源氏の手紙)

花散里

過かてにやすらひ「給ふ折しもほとゝきすなきてわたるもよほしき」こえか  
ほな「れは御車おしかへ」させ給ひてれいの「惟光をいたたまふ」をちかへり  
えそしの「はれぬほとゝきす」ほのかたらひし宿「のかきねに

(光源氏と中川の女の贈答)

須磨

御馬ともちかうた「てて見やりなるくらなかに疎なる稲とも」とり出てゝか  
うなど「めつらしうみたまふ

(宰相中将の訪問)

あかし

入道ひはの法師に「なりていとをかしよう」めつらしき手ひ「とつふたつき  
出」てたりさうの御琴「まゐりたれはすこし」ひき給ふもさま「いみしう  
のみおもひ」きこえたり

(明石入道と光源氏の演奏)



漂漚

水鶏たにおとろかきすはいかにして「あるいとなつかしう」いひけち給へる  
とりく「すてかたき世かな」かゝるこそ中々身も「くるしけれとおほす」  
おしなへてたゞく水鶏におとろかはうはの「空なる月もこそいれ」

(花散里と光源氏の唱和)

蓬生

むくらは西東の「みかをとちこめ」たるそたのもしけれど「くつれかちなる  
めくりの垣を馬牛など」のふみならしたる道にて「春夏になれば放ち」かふ  
あけまきの「こゝろさへそめさままき」

(荒廢した末摘花邸)

明治四十五年の

さつき 花蹊書

紫のゆかり 三

梅子

せきや

せき山にみなおり「るてこゝかしこのす」きの下に車ともかき「おろし木かく  
れに」居かしこまりてすく「したてまつる」

(逢坂の関で空蟬と光源氏一行邂逅)

絵合

ふるきあたらしき絵ともいりたるみつし「ともひらかせ給ひて」女君ともろ  
共に「いまめかしきはそれ」それとえりとゝのへ「させたまふ」

松風

むかしの人も哀と「いひける浦の朝きり」へたゞりゆくまゝに「いと物恋しく  
て入」道はこゝろすみはつ「ましくあくかれて」ななめありたり

(明石母子明石の浦を発つ)

うす雲

めのと少将とてあ「てやかなる人はかり」御はかしあまかつ「やうのものとり  
て」のる人たまひによる「しきわか人わらは」などのせて御おくりにまゐら  
す

(明石母子の別れ)

朝顔

冬のよのすめる月に「雪のひかりあひ」たるそらこそあや「しう色なきも  
の」身にしてみてこの世の「外のことおもひなか」さるおもしろさも哀「さも  
残らぬ折なれ」すさまじき例にいひ「おきたる人の」こゝろ「あさ」よ

(紫上との女性評)

をとめ

御前にめして御らむせむうちなら「しに御前をわたら」せてと定めたまふ「  
すつへうもあらず」とりく「なるわらはへの」やうたいかたちを「おほしわつ  
らひて」今「ところのれうを」これより奉らはや「なとわらひたまふ」

(五節の舞姫に惟光の娘を奉る準備)

玉かつら

我をはみしりたり「やとてかほをさし」出でたりこの女手を「うちてあかおも

とに「こそおはしましけれあなうれしともうれしいつくよまりたま  
ひたるそ「うへはおはしまさ「すやおとろく「しくなく

(三条と右近の邂逅)

大正元年

仲秋の夜

花溪女史書

時年七十三

紫のゆかり 四

大むら梅子

はつね

御琴とものうる「はしき袋ともして「ひめおかせたまへる「みなひきいてゝお  
し「のこひてゆるへるを「とゝのへさせたまひ「なとす

(男踏歌の翌日)

胡蝶

ませのうちねふ「かく植ゑし竹の子の「おのか世々にや生ひ「わかるへきお  
もへは「うらめしかへい事そ「かしとみすをひき「あけて聞えたま「へはるさ  
りいてゝ「いまさらになららん「世か若竹の生ひ「はしめけむねをは「尋ね  
む

(源氏と玉鬘の唱和)

ほたる

偽り馴れたる人や「さまく「にさもくみ「侍らむ唯いと誠の「事とこそ思ひ

給「へられけれとて硯を「おしやり給ふ

(光源氏の物語論)

床夏

妻戸のほそめなる「より障子の明あひ「たるを見入れ給ふ「この人もはた気  
色「はやれるかへしや「かへしやとどうを「ひねりつゝとみにも「うちいてす

(内大臣、近江の君をのぞく)

かゝり火

おまへのかゝり火の「すこしきえかたなるを「御ともなる右近の大「夫をめし  
てともし「つけさせたまふ

(庭の篝火を焚かせる)

野分

みすのふきあけ「らるゝを人ゝおきえて「いかにしたるにかあ「らむうちわら  
ひ「たまへるいとみしう「みゆ花ともを「くる「くるしかりてえ見「すてゝ  
入り給はず

(夕霧紫上を垣間見る)

みゆき

雪たゝいさゝかうち「散りて道のそらさへ「艶なるに親王たち「上達部など鷹  
に「かゝつらひ給へるは珍「らしき狩の御よそひ「ともをまうけたまふ

(大原野行幸)

藤はかま

うつたへに「らにの花のいと面「おもひもよらてとり「白きをもたまへり「た  
まふ御袖を「けるをみすのつまより「ひきう「かして「さし入れて是も御「す

へき所はありけり」ととてとみにもゆるさずてもたまへれば

(夕霧、蘭を持って玉鬘訪問)

紫のゆかり 五

梅子

まきはしら

くれ竹のませにわさと「なうさきかゝりたる」にほひいと面白し「色に衣をなとの給」ひて思はずに「るての中道へたつ」ともいはてそ恋ふる「やまふきはな

(光源氏の玉鬘を思う歌)

梅かえ

みすあけわたして「けうそくの上」にさうし打おきはし「近くうちみたれて」筆のしりくはへて「おもひめぐらし」給へるさまあく世「なくめてたし

(光源氏草子を書く)

藤の裏葉

東の池に舟ともうけてみつし所の「鵜飼のをき院の」うかひをめしなら「へて鵜をおろさせ」たまへりちひさき「鮎ともくひたりわさ」との御覧とはなけ「れと過ぎさせたまふ」道のけうはかりになむ

(六条院行幸)

若菜上

中納言君見奉り「おくとて妻戸」押し明けたるにたち「返り給ひてこの」藤はいかに染めけん「色にか猶えならぬ」心そふにほひにこそ「いかてか此かけをば」たちはなるへきと「わりなくいてかてに」おほしやすらひたり

(光源氏の朧月夜訪問)

わかなの下

御しとねのすこし「まよひたるつまより」浅みとりのうすやう「なる文のおしまき」たるはしみゆるを「何心もなく引きいて」御らんするにをど「この」手なり

(光源氏、柏木の文発見)

かしは木

やをらすへりいて「この侍従とかたら」ひたまふおと「は」しりたまはすうち「やすみたると人」として申させ給へは「さおほして忍び」やかにこのひしりと「物語したまふ

(柏木、侍従を語らう)

横笛

おもはん人にいかて「つたへてしかなと折」き「えこち給ひしを」思ひいてたまふに今「すこしあはれおほく」そひて試にふき「ならず

(夕霧、柏木の笛を譲られる)

大正二年なつ

七月のなかは

花蹊女史書

むらさきのゆかり 六

花囁

鈴虫

月さしいてゝいと「はなやかなるほども哀れなるに空をうち」なかめて世の中「さま／＼につけてはか／＼なく桜にかはるあり」さまもおほしつけ「られて例よりもあはれなる手に」かきならす

(十五夜の琴演奏)

ゆふきり

御かへりもてまる「れるをかく例にもあ」らぬ鳥のあとのやう「なれはとみにもえ」とき給はておほと「なふらちかうとり」よせて見給へは女君もへたてたる「さまなれといと／＼」見つけ給ひてはひ「寄りて御うしろより」とりたまひつ

(雲居雁に御息所の手紙を奪われる)

みのり

れうわうのまひて「急になる程の末つ」かたの楽はなやかに「にきは／＼しく聞ゆるにみな人のぬき」かけたるもの／＼色／＼「なとも物の折からに」をかしう見ゆ

(業上法華經千部供養)

まほろし

導師のさかつき「の席に」春までの命もしらす「ゆきの中に色つく」梅をけふかきしてむ「御かへし」ちよの春見るへき「花と祈りおきてわか」身そ雪ととも「ふりぬる

(光源氏と導師の唱和)

匂ふ宮

衛門督権中納言「右大将なとさくらぬ」上達部あまたこれ「かれとのりましり」

いさなひたてゝ六條「院へおはす道のや／＼」ほとふるに雪いさ／＼か「ちりてえむなるたそ」かれときなり

(賭弓の還響)

紅梅

笛すこしつかう「まつれともすれは」御前のおんあそひに「めし出てらる／＼かたはら」いたしやまたいと「わかきふえをそ」うちあみて双調に「ふかせ給ふいとを」かしうふい給ふ

(紅梅大納言の会話)

明治天皇御製

すなほにてをかしき「ものは敷島のやまと」ことはのすかたなりけり

大正三年

さみたれ月

花蹊女史書

ここでとりあげられる『源氏物語』本文は、有名な場面が多いが、必ずしも巻の中心を成す場面と決まっているわけではない。『源氏物語』の各帖の巻名と、その内容の一端がわかるように、抜粋本文が並べられている。この手本の典拠と見なし得る文章は、現段階では未確認である。これが、『源氏物語』の抜粋本文あるいは定型の書道手本としてすでに流布していたものなのか、跡見女学校で撰文された可能性もあるのか、

さらなる検討の余地がある。<sup>(18)</sup>六の末尾には、「やまとことのは」を賞賛する明治天皇御製があり、それを学ぶ教材として、『源氏物語』の本文が取り上げられていたと考えられる。

### 三、折り手本『源氏文字鎖』

一方の『源氏文字鎖』も、同じ法帖仕立ての折り手本である。いま把握している限りでは、五点の所蔵を確認でき、縦二十一・二センチ横七・八センチ（写真5、6）、表紙裏にはやはり所持者の生徒と思われる名がみえ、そのうち年時の最も早いものの本文をあげれば、次のとおりである。

写真5



源氏文字鎖 全

石川静子

源氏のすくれて「やさしきははかなく消しきりつはよよそにもみえし箒」木はわれから音に「なく空蟬ややすらふみちのゆふ顔はわか」紫の色ことには「ふ」末摘はなの香に錦と「みえし紅葉賀かせを」いとひしはなの宴むすひかけたる葵草櫛のえたにおく「霜ははなちる里の」子規すまの浦はに「沈みにし忍ひて通ふ」明石かたた

のめし「あとの漂滞しけき蓬生露

ふかみ水に「せき屋の影うつし」し

らぬ絵合面白や「宿に絶せぬまつか

せも」物うきそらの薄「雲よ」は朝

かほの「花の露所縁もとめし少女

子かかけ」つゝ忍ふたまかつらら

うたき春の初音の日ひらくる花

に「舞ふ胡蝶ふかき蛍の」おもひこ

そそのな「つかしき常夏や」遣水

すゝしきかゝり「火の野分のかせ

に「ふきまよひひかけ」曇らぬ御幸

には「花もやつる」藤はかま「楨の

はしらはわすれ」しを折る梅かえ

の「匂ふやととけにし」藤の裏葉か

ななに「とてつみしわかなそも」森

の柏木ならのはよ「横笛の音は」お

もしろや「宿の鈴虫声もろく」くら

き「ゆふ霧秋ふかみ」みのりをさとりし磯の「海士幻のよのほとも

なく雲隠れにし」夜半の月きくなも「匂ふ宮の内ちりくる」紅梅色深

し忍ふ節「なる竹河や八十うち」川の橋姫のゆれ「はてにし椎か本共

に「むすひし総角は」春をわすれぬ早蕨も「もとの色なき宿り」木や

やとにもとめし「東やの」ちの名も「うき舟のうち契」はてなるかけ

写真6



源氏物語のすくれて「やさしきははかなく消しきりつはよよそにもみえし箒」木はわれから音に「なく空蟬ややすらふみちのゆふ顔はわか」紫の色ことには「ふ」末摘はなの香に錦と「みえし紅葉賀かせを」いとひしはなの宴むすひかけたる葵草櫛のえたにおく「霜ははなちる里の」子規すまの浦はに「沈みにし忍ひて通ふ」明石かたた

ろふを「おのかすさひの手」ならひははてそゆ<sup>22</sup>かしきゆめの浮はし

大正ふたとせのなつ

さみたれはるゝあした

はなのこみちしるす

『源氏文字鎖』は、『源氏物語』五十四帖の巻名とその内容に因むことばを、七五調で句の切れ目の末尾と次の句の頭が同じ音で続くように、繋げた詞章として知られる。『源氏巻次第長歌』『源氏名寄文章』『源氏目録長歌七語之文字鎖』などの異称があり、<sup>(19)</sup>それらの本文は、必ずしも同一ではない。たとえば、『後水尾天皇源氏巻次第文字瑣』<sup>(20)</sup>は「桐壺の更衣うせてのちちぎりむなしき御なげき消えし小萩におけるつゆ<sup>21</sup>ゆげひの命婦つかはせし」しのぶあまりのふみがきは「わすれがたみのたまくしげ<sup>22</sup>げになき人の形見かな」なみだもよほす虫の音に」とあり、冒頭に桐壺更衣哀傷場面になむ長い詞を持つ、系統の異なる本文である。この折り手本の本文と近いのは、いわゆる往来物である。『往来物大系』所収の『源氏名寄文章』は、「源氏のすぐれ<sup>23</sup>て優しきは」その名の高<sup>24</sup>き桐壺や余所<sup>25</sup>にてみえし<sup>26</sup>箒木はわれ<sup>27</sup>から音に啼<sup>28</sup>空蟬や休らふ<sup>29</sup>道の夕顔は」と始まり、「その名も高き」「余所にて」の異同がみられるが、これは本学所蔵の手本とほぼ同じ系統の本文と考えられる。<sup>(21)</sup>ま

た、同じ往来物の『源氏かな文章』<sup>(22)</sup>も、句の末尾と頭の音を合わせた文字鎖の体裁であり、『源氏名寄文章』と、同系統の本文である。<sup>(23)</sup>漢字の当て方や字母などの表記の違いや、詳細な語句の揺れはあるものの、これらは江戸時代の教科書である往来物として流布した本文である。翻刻本文の末尾は、「おのかすさひの手ならひははてそゆ<sup>24</sup>かしきゆめの浮はし」であり、手習い上達を願う文句で歌いおさめられている。<sup>(24)</sup>『源氏物語』の五十四帖の内容をふまえつつ、書き手本にふさわしい結びとなっている。手習いのためのかな手本なのである。跡見女学校では、寺子屋などで使用された初級教科書である往来物を、書道の手本として採用し、花咲自ら生徒に宛てて書いていた。

この他の本学所蔵品四点も、概ね同系統の本文であり、その末尾の記載から花咲晩年のものと知られ、その筆跡を見る限り、いずれも自筆とみなせる。<sup>(25)</sup>これらの手本は、「お師匠様」と仰がれる花咲と生徒を繋ぐ教材である。柳町移転以降の規模拡張にともない、生徒数も増大し、高等女学校を見据えることを余儀なくされる時期に、花咲はその教授形態を守る。教養としての教育が、このような形で継続的に行われていたのである。

『源氏物語』を女子教育に取り入れていたのは、跡見女学校に限ったことではない。たとえば、実践女学校の下田歌子は、『源氏物語』に力を入れ、自ら講義していたようである。<sup>(26)</sup>花咲は自ら講じるわけではなく、物語の抜粋本文や手習い用として流布した文章を教材として書き与え、生徒たちに『源氏物語』教養として体得させるのである。

跡見女学校では、恵まれた教員たちによって『源氏物語』が積極的に掬いあげられるが、それを知的教養として崇めるのとは違う。『源氏物語』は、花蹊の筆により、実科目のなかに溶かし込まれるようにして教授され、人格的教養に生かされていったと考えられる。

#### 四、明治期の『源氏物語』享受のなかで

以上、跡見女学校における教育の実践の一面に光を当ててみた。こうした『源氏物語』は、明治から大正にかけての時期に、どのように読まれた作品であったのか。それには、稿を改めて考察する必要があるが、いま、その一端にふれておきたい。

明治期の『源氏物語』は、近世の国学の伝統上にある。『源氏物語』の注釈作業は、近世の国学者たちによってもすすめられ、今日の注釈にも影響している。跡見女学校の科目に『源氏物語』がとりあげられるのは、そうした伝統のうえにあるものであろう。また、手習いに用いるのは、寺子屋などの流れを汲むとってよい。笹川臨風を招いての「愛読書」と題した講演では、『源氏物語』が読むべき書とされ、明治の知識教養人であり俳人でもあった笹川によって、評価されている。<sup>(27)</sup>

そうした『源氏物語』享受のなかで、女子教育の普及とも関わって、新たな様相もうかがえる。『源氏物語』は、女性作家たちにとっての、ひとつの偉大な指標ともみなされている。明治期の女性作家たちの活躍は、平安時代の女性作家たちの台頭とも、見合う部分がある。樋口一葉『たけくらべ』明治二十八年は『源氏物語』を意識しているが、実際、

樋口一葉じしんもその日記『水のうへ日記』(1895)のなかで、自己の文学への評価を誇らしげに綴る際に、「わか松、小金井花圃の三女史か先んするあれともおくれ出て出たる此人をもて才筆なといふもあり 紫清さりてことし幾百年、とつてかはるへきはそれ君ぞなといふもあり」と記す。平安時代中期の代表的な女性作家である紫式部・清少納言に匹敵するという自負がある。<sup>(28)</sup> 紫式部とその『源氏物語』は、すぐれた文学作品の指針として、当時の文学に関わる女性たちに意識されていたのではないか。

その『源氏物語』の現代語訳も試みられる。与謝野晶子の『新訳源氏物語』(金尾文淵堂)は明治末から大正にかけてであり、上巻 明治四十五年二月／ 中巻 四十五年六月／ 下巻の一 大正二年八月／ 下巻の二 大正二年十一月である。<sup>(29)</sup> ただし、大胆な抄訳は、晶子の個性であると同時に、前代からの流れをひくものでもある。中世近世には、『源氏物語』の内容を手軽に把握するための梗概書が作られている。晶子の『新訳源氏物語』をその路線に位置づける見方も出されており、前代からの流れと、新時代の女性作家の結びあうところに、大胆な現代語訳の試みを見るべきであろう。後の『新訳源氏物語』(昭和十四年)とは性格を異にする。<sup>(30)</sup> この『新訳源氏物語』は、『源氏物語』の大衆への浸透を導き、そこに流行も生まれてくる。

跡見女学校の在学生たちにも、『源氏物語』は愛好されていたようである。『汲泉』(大正三年六月)のアンケート結果「在学生の趣味好尚」によれば、「自分の信仰する歴史上の人物」の第一位は、乃木大将夫妻、

第二位は楠公父子、第三位が紫式部である。第一位第二位は時代の指向の反映であり、三位は与謝野源氏の人気によるものである。

明治・大正期の『源氏物語』は、前代の伝統と新しい時代の交差のなかにある。跡見女学校では、こうした『源氏物語』をとり入れ、伝統的教授法を重んじ、新しい風も感じつつ、人格教養に生きるような教育が行われていたのである。

注

(1) 拙稿「跡見女学校のカリキュラムと教授」『人文学フォーラム』(平成十六年三月)。

(2) 『跡見花蹊教育詞藻』掲載の「私学開業願」には「校名 跡見学校」とある。花蹊の日記を閲覧する機会を得たが、それには開校当日の記述はなく、後に書かれた略歴で開校当日に言及しており、そこでは「跡見女学校」とあり、後年の名称と混同している。

なお、小石川柳町新校舎には「跡見女学校」の看板を掲げたという記述もあり(「跡見花蹊女史の面影」『汲泉』(昭和二年十月)、明治二十七年規則は「跡見女学校」である)。

(3) ここで「国学」とあるのは、従来の伝統が意識されての用語であろう。

(4) 「伊藤歌子氏教科書目録」(史料編纂室作成)による。花蹊の日記を閲覧する機会を得た。それによると、明治二十五年三月十四日に伊藤歌子の「退校願出」とある。

(5) 『国学者伝記集成 続篇』(岡本出版社 昭和十年)。それによれば、「それ

女子は教育の本也。女子は早晚、人母となるものなれば、その児を挙るに至りて直接に大関係あるべしとて、是より大に女子教育に熱心せられぬ、入ては大日本婦人教育会、群馬婦人教育会、女学雑誌、新婦人、その他、女子に係ある諸会雑誌を助け、出ては私立女学校に講師たり」とする。すでに、明治二十年の『女学雑誌』に叢話を連載しており、『国学者伝記集成』の出講先のなかに跡見女学校がみえる。教鞭をとった時期は不明で、『跡見女学校五十年史』の、小石川移転後明治三十三年頃までに教鞭をとった人の一覧には、「鈴木弘恭」はみえない。鈴木弘恭が女子教育に力を入れたのは、「賢母」養成のためであろう。

(6) 「花蹊先生の卓見」『噫御師匠さん』『汲泉』(大正十五年四月)。なお、とじカッコの脱落と思われる部分を補った。

(7) 『近代文学研究叢書11』(昭和女子大学光葉会 昭和三十四年)の「大和田建樹」の項。

(8) 注(7) 文献の記述による。

(9) このあたりの事情は、神野藤昭夫「近代国文学の成立」『森鷗外論集 歴史に聞く』(新典社 平成十二年五月)に詳しい。

(10) 佐佐木信綱／藤川忠治記「古典科時代のおもひで」『国語と国文学』(昭和九年八月)。明治十五年の教授及び講師として記されているのは、教授として、小中村清矩・木村正辞・栗田寛・内藤恥叟・飯田武郷、講師として本居豊頼・小杉楯邨・佐藤誠実・物集高見・久米幹文・松岡明義・岡谷甕谷・佐佐木弘綱、科外の心理学倫理学は外山正一・井上哲次郎。明治十七年の第二期生募集時の教授講師はほぼ同じだが、栗田・佐藤が退き、佐佐木が高等師



範に転じ、南摩綱紀・秋月胤永・大和田建樹が加わり、論理学を坪井九馬三が講じたとある。なお、第二期生に生田目経徳の名もみえる。

(11) 和田英松／中島唯一記「古典講習科時代」「国語と国文学」(昭和九年八月)。久米が「栄華物語」「大鏡」「今鏡」「増鏡」「吾妻鑑」「宇津保物語」、木村が「万葉集」、本居が「古事記」などとみえ、文法は当初は佐佐木、十七年入学生は物集とある。なお、跡見で教えた落合直文が、明治十五年に古典講習科に入り、同年に中途退学したことにもふれる。

(12) 注(4)に同じく、花咲の日記によると、三月十日の記述に「余 開校テより此日に至り 法帖揮毫一万帖ニ至ル 一万号 小菊典侍 園祥子也」とある。

(13) 注(4)に同じく、花咲の日記によれば四月九日に祝賀会が行われたようであり、「金銀ノ短冊一万帖ニ書して食堂ノ上ニ掲ク」とある。

(14) 平成十四年六月に、跡見学園女子大学短期大学部・文京区教育委員会共催による『源氏物語』をテーマにした公開講座が開催され、高橋六二先生よりこの手本が紹介され、展示もされた。

(15) いま、その外題を漢字を反映させて記せば、次のとおりである。奥書から作成年のわかるものは括弧内に記す。「紫のゆかり」一／「むらさきのゆかり」二(明治四十五年)／「紫のゆかり」三(大正元年)／「紫のゆかり」四／「紫のゆかり」五(大正二年)／「むらさきのゆかり」六(大正三年)。

(16) 花咲資料館所蔵の跡見純弘理事長(寄贈の折り手本を閲覧する機会を得た。当館所蔵の折り手本は八点あり、そのいずれも花咲直筆で、二代目校長の跡

見李子女史の所持品である。これらの手本は、いずれも表紙に所持者の名が直接書かれており、「李子」の名とともに、李子女史の雅号「花(華)洲」「花洲女史」が多く記されている。これらの手本から推察すれば、この『源氏物語』の折り手本の表紙裏の「花咲」も、所持者の大村梅子がいただいた雅号であったかと考え得る。今後の検討課題としたい。

(17) 「らにの花のいと面白きをもたまへりけるをみすのつまよりさし入れて是も御すへき故はありけりとてとみにもゆるさてもたまへれはうつたへに御袖をひきうこかして」という本文を、散らし書きにしている。

(18) 注(7)文献に、「後(三四・七)跡見花咲女史の依頼で四季習字帖の消息文をつづった」とある。こうした記述を考慮すれば、『紫のゆかり』の撰文の可能性もあり得るが、その判断には慎重でありたい。各巻の抜粋本文は、特別な形態ではない。まずは、広く出典の確認をすることが課題であろう。『湖月抄』や『絵入源氏』の本文とは細かな異同がある。今後の調査を期したい。

(19) 伊井春樹『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版 平成十三年)。「源氏文字鎖」の項。

(20) 『皇室文学大系 第一輯』『御撰集』第一巻、(名著普及会 昭和五十四年)。

(21) 『頭書絵入 源氏名寄文章』(寛政七年六月書・刊 高橋尚富筆 高井蘭山校 花屋久次郎板) 石川松太郎監修『往来物大系 第78巻』(大空社 平成六年) 所収。

(22) 『長雄 源氏かな文章』(江戸時代中期刊 数楽耕文筆 山崎金兵衛板) 石川松太郎監修『往来物大系 第78巻』(大空社 平成六年) 所収。

- (23) 静嘉堂文庫所蔵「後光明院御製源氏目錄長歌七五之文字鎖」(外題は『源氏文字鎖』) (マイクロフィルム版 物語文学集成 雄松堂 所収) は同系統の本文である。また注(19) 文献に引用されている『先代御便覧』所収の『源氏文字くさり』(国立歴史博物館所蔵 旧高松宮家) 本文は、表記や詳細なことばの異同や、一部本文の脱落があるが、同じ系統の本文と考えられる。
- (24) 『源氏かな文章』では「おのかしそめの」、『源氏名寄文章』は「おのがしそめし」。これらも手習いのし始めの意であり、ともに上達を願うことばで歌いおさめられる。
- (25) 掲出した以外の手本はすべて「源氏文字くさり 全」で、同様に所持者の名があり、三点は末尾の「花咲」の前に、それぞれ七十六歳、八十三歳、八十四歳とあり、一点は署名がなく年時も不明である。これらの手本についても、さらなる精査を期したい。
- (26) 実践女学校の前身「桃天学校」に学んだ本野久子の回想に、「まず眼目のお講義は源氏物語で」とあり、また「先生があいふお方でしたから、塾生の誰もが最も力を入れたのは、その当時からすでに天下一品の面影があった源氏物語のお講義と和歌のお題を頂いて作ることの二つでした。」とある。
- 『実践女子学園一〇〇年史』(平成十三年) 所引『下田伝』第五章「その頃の下田先生」による。
- (27) 笹川臨風「愛読書」『汲泉』「好文木」(大正二年三月)。笹川は、愛読書の第一に『源氏物語』をあげ、次に『平家物語』をあげており、古典の代表的作品としてみなしていたことが知られる。同窓会誌の『汲泉』には、源氏香
- 図も使用されている。
- (28) シンポジウム「源氏物語はなぜ読まれるのか」『中土文学』(平成十三年五月)の原岡文子氏の報告に詳しい。
- (29) 拙稿「王朝／女流／文学」『日本文学』(平成八年八月)。
- (30) 『新訳源氏物語』については『与謝野晶子の新訳源氏物語―薫・浮舟編』の神野藤昭夫「解説―『新訳源氏物語』と幻の『源氏物語講義』」(角川書店 平成十三年)に詳しい。
- (31) 島内景二「パンドラの箱を開けた与謝野晶子」『文豪の古典力』(文春新書 平成十四年)。
- (32) 2002年北京日本学研究中心シンポジウム文学分科会での報告をもとにした拙稿「垣間見と「おほけなし」―『源氏物語』の現代日本語訳の場合―」でふれた。『世界語境中的源氏物語』(人民文学出版社 平成十六年二月) 所収。
- 附記 本稿の執筆にあたり、学園当局の格別なご高配を賜った。資料閲覧に際し、跡見学園史料編纂室、女子大学図書館ならびに花咲資料館のお世話になり、諸資料について中野一夫氏、今井哲氏に、資料の読み方については岩田秀行氏に、貴重なご教示を賜った。心より感謝申し上げます。